

いちめんのなののはな いちめんのなののはな いちめんのなののはな いちめんのなののはな  
 いちめんのなののはな いちめんのなののはな いちめんのなののはな かすかなるむぎぶえ  
 いちめんのなののはな

詩:山村暮鳥「風景」より

山村暮鳥の詩を思い出した。暮鳥の詩は「いちめんのなののはな」のフレーズが8回続くが、羅平の菜の花を見ていると百万回唱えても終わらない。「ぜんめんのなののはな」なのだ。

2月27日夜8時過ぎ、羅平バスターミナルは真っ暗で人影も少なく、ホテルの予約さえしていない私たちは少し不安になった。バスを降りると客引きが何人も寄って来る。その中で、中国語が通じそうもない外国人と分かってからも、熱心に話しかけてきた若い運転手と交渉を始めた。翌日の観光に車をチャーターするための交渉である。話し合いの結果、交渉が成立。運転手は張さんという。張さんにホテル探しもお願いした。あちこち尋ね回って三か所目で、やっと宿をとることができた。

翌朝、すでに起床していたものの、6時前には張さんが部屋をノックして起こしに来た。なんと律義で誠実な人だろう。

日の出と菜の花の景観で有名な金鷄峰に向け、日の出時刻を目指して宿を出た。天気予報は快晴、しかも菜の花は前日に満開を迎えたという。ややひんやりとした早朝の街を抜けると辺り一面、菜の花畑が広がっていた。張さんが指さす方を見ると、小高い山の中腹に展望台が見えた。その展望台から日の出と菜の花を見るのだ。しばらく階段を上って展望台に着くと、すでに人の山、人の海。一段高いところにはカメラの三



脚が所狭しと立ち並び、大勢の中国人写真マニアが二コンやキャノンの高級カメラを覗きながら、陽が昇るのを待っている。下の方にはスマホやコンパクトカメラを手にした、これまた大勢の中国人観光客や私たちのような外国人観光客がいた。

7時半近く、太陽が向かいの山から姿を現し、ぐんぐん上って来た。見る見るうちに太陽は大きく赤く光り輝き、空を染めていく。薄ぼんやりしていた菜の花畑が、光を浴びてくっきりと黄色い姿を見せてきた。菜の花畑がただ広がっているだけではない。カルスト地形のため、大小の椀を伏せたような山が絶妙な配置で点在している。まるで菜の花の海に大小幾つもの島があるようだ。ここからの景色なら、どんな素人でも間違いなく名カメラマンになれるだろう。桃、梨、海藤も満開で菜の花の黄色と見事に調和している。

気温はぐんぐん上がり、長袖Tシャツ一枚では暑いくらいになった。展望台から下りて、菜の花畑に向かう。畑の中には観光用の道があり、散策しても、かわいく飾り立てられた牛車に乗って巡ってもよした。メイン道路の両側には土産物屋が並び、蜂蜜や菜の花の食用花粉などを売っている。あちこちに養蜂業者もいて、この時期は蜜を集める作業に大忙しだ。分離器にかけたできたての蜂蜜を容器に注いでいるのを見たら、思わず「買います」と声を上げてしまっていた。予定外の買い物だ。

次の目的地は九龍瀑布群風景区である。まったく中



国の滝というのは人の期待を裏切らない。十もの滝はそれぞれに趣が違い、どれも絵になる。ここは中国六大瀑布のひとつに選ばれている。圧巻は最後に姿を現す「白絮瀑」である。この滝に近づく遊歩道はない。上から見下ろすすばらしい景観は、私の筆力では到底表現できない。遠く向うから、いちめんのなのはなの海、どこまで行っても菜の花畑がなだらかに続いている。その間から、かなり落差がある堂々とした滝が流れ落ちているのだ。静謐な画面に滝だけが動いている。いつまでもこの景色を見ていたかった。

車に戻ると「明日のバスで元陽に行きたい。バスのチケットを買いにターミナルに行っておほしい」と張さんをお願いした。張さんは「先ずターミナルに行って、その後まだあまり観光客が訪れない菜の花の名所に行く。ターミナルにまた戻る契約はしてないから、60元上乗せしてほしい」と言い出した。何度も何度も聞き返し、やり取りを繰り返して、やっと張さんのこのような要望が聞き取れた。「わかった。それなら観光がすべて終わった後、自分たちでチケットを買いに行く。契約通りにやって」と答えると、張さんは私の聞き分けのなさ、60元をけちるしびとさに根負けしたのか「わかった。契約通りの料金300元でいい」と言った。そして「私は若いけれど、あなたたちは年寄りだ。あなたたちだけでチケットを買いになど行かせられない。これも何かの縁だ。もうあなたたちを親戚か友達のように思っているから」とじんわりさせる言葉を続け、ターミナルに直行してくれた。中国に行くと更に強気になる私に、辛抱強く終始にこやかに対応してくれた張さんだった。

売り切れ寸前のチケットを手に入れ、張さんおすすめの穴場に向かった。どこまで行っても平らな菜の花畑の一角に、何千人も入れるような野外劇場がある。毎年秋には有名歌手が来て野外コンサートが開かれるそうだ。花火もたくさん揚がり、それはそれは盛り上がるそうだ。こここの菜の花畑は、例えていえば、北海道の大平原が真っ黄色に染まったようだ。きれいに開いた一枚一枚の花びらを間近に見ながら、

何度もカメラのシャッターを押した。

いよいよ最後、日の入りと菜の花の景観で有名な牛街螺蛳田に到着した。こここの観光客と車の数は凄まじい。日の入りまで3時間以上もあるのに、菜の花畑が見渡せる車道際の展望台は人と車でごった返していた。景色を見下ろせる場所にはお約束のように三脚が並んでいる。展望台から見下ろすと名前の通り、菜の花畑が田螺のように渦を巻いていた。実は、畑ではなく棚田で、稲の刈り入れ後に菜の花の種をまくという。ちなみに今まで見てきた菜の花畑は、菜種を収穫後、トウモロコシや唐辛子を育てるそうだ。意図せず出来上がった渦巻状の棚田を菜の花が埋める、不思議な造形美に魅せられる。よくぞここに展望台を造ったものだ。道路はすでに渋滞。日の入りを待たずに帰路に着いた。

青空のもと、いちめんのなのはな、しかも満開の菜の花に遭遇できた。「元陽に着いたら必ず電話してください。心配だから」心熱い張さんの言葉が忘れられない。



白絮瀑の景観

